

「先駆者」

朗読箇所

ルカ福音書7章27-35節

1、待降節の聖書テキストの一つはバプテスマのヨハネのことが入っています。

ヨハネはヨルダン川流域の荒れ野で活動した預言者です。墮落しきった神殿宗教を改革する洗礼運動を背景に登場してきました。一般に「洗礼運動」は祭儀的な意味での汚れを浄めるため繰り返し行われた沐浴でありましたが、ヨハネの洗礼運動はそれとは全く違って、世の乱れに対して、神の審判が近いことを告げ、審きを免れるためには、罪の悔い改めを要求し、その徴としての洗礼を一回限りのもとする実存と内面化を伴った運動でした。「斧はすでに木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる」(マタイ3:10)。エリヤの再来だ(マタイ11:14)と言われました。イエスはこのヨハネから洗礼を受けたのです(マコ1:9)。ヨハネは、ガリラヤ領主ヘロデ・アンティパスの違法な結婚を告発したため投獄・処刑されました。(この話は0、ワイルドの戯曲「サロメ」が描いています)。初代教会は、ヨハネをイエスの先駆者として位置付けました。

2、「今の時代の人たち」(31)は「ファリサイ派の人々や律法の専門家たち」(30)を意味しています。この人たちは、イエスにもヨハネにも、耳を傾けませんでした。悔い改めの予言活動に対しては、「葬式の歌に泣かない」遊びの子どものようなものでした。厳しい禁欲を非難しました。イエスが徴税人や罪人と一緒に食事し、神の国の祝宴を示すと、「大酒飲みだ」といって「笛を吹いた時に踊ってくれない」子たちのように冷やかでした。しかし「知恵の正しさは、それに従うすべての人によって証明される」

(35)とあります。これは「神の御心」(30)、神の救いの計画です。22-23節の言葉にあるように、「虐げられた人間が回復している事実」を意味しています。確かに、ヨハネとイエスは違います。ヨハネは、荒野、断食、禁欲、求道を、イエスは街、宴会、自由、信仰、癒し、を象徴します。預言者や先駆者の厳しさがヨハネにはあり、イエスには救いによる自由や喜びがあります。しかし、それはコインの裏と表のように離れ難く結び付いています。神の前に一人立つ厳しさがあって、共に生き食する喜びがあります。「今の時代」に対してはこの二面の語りかけが必要なのです。ヨハネはその一面を示します。ヨハネの先駆によって、イエスの来臨が鮮やかになります。

3、笑い鋭い批評精神で現代の非人間化に向きあっている作家アメリカのカート・ボカネットさんは作家井上ひさしさんとの対談の中で「坑内カナリヤ理論」をのべました。石炭を掘る炭鉱では漏れたガスを検出するために、籠に入れたカナリヤが持ち込まれます。このカナリヤのように社会の危険に警鐘を鳴らすのが芸術家、作家だということです。井上さんは「ボカネットさんにはもっともっといいカナリヤになってほしい、僕なんかアジアの、そして日本のカナリヤになりたい。そしてカナリヤ・リーグを作りたい」と言っています。イエスが来られる前に、沢山のカナリヤがいたに違いありません。先駆者であったヨハネもその一人でした。私達も、この人間を息づまらせる時代の中に生きて、カナリヤのごとき存在として待降節を過ごし、イエスに従う証しを立ててゆきたい。